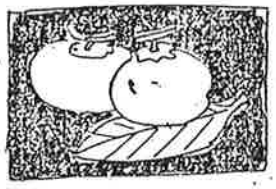

政界回顧二十年（5）

二・二六事件前後（其の三）

北　吟　吉

一、廣田内閣の成立

岡田内閣は二・二六事件の責任を痛感して既に辞表を提出した。八十八歳の西園寺老公は三月二日午後三時二十五分東京駅着、直ちに宮中御差し廻しの自動車にて参内、陛下に拝謁仰せつけられ、天機を奉伺して退下した。湯河原にて危難を脱れた牧野伯は、西園寺に先だつて入京してゐた。三日には、清浦伯も熱海より上京してゐた。上京以来重責を荷つて沈忠黙考する老公は此等の重臣と会見して意見を徴することなく、たゞ一人熟慮を重ねてゐた。近衛説・宇垣説・平沼説など乱れ飛んだが、老公は四日午後参内し、貴族院議長近衛文麿公を後継内閣の主班に奉薦して退下した。

陛下は直ちに広幡侍従次長をして近衛公を召さしめられ、内閣組織の大命を降下されたが、公は暫時の御猶予を乞ひ奉り御前を退下し、西園寺公及び一木枢相と会見、協議を重ねた結果、健康優れず、重大時局担当に堪えずとして大命を拝辞した。

こゝに於て老公は五日川島陸相、大角海相と会見の後、再び参内、後継内閣の首班として組閣の大命を外務大臣広田弘毅に降すべき旨、奏請、広田氏は同日午後三時参内、大命を拝受した。この間、内大臣は湯浅宮相、宮相は松平大使に内定し、殺害された教育総監の後任には西義一大将が親補せられた。広田は外相官邸を組閣本部として、組閣の参謀として川崎文相と元大使吉田茂を起用し、六日午前三時には早くも

左の如き閣僚の確定を見、その日の午後親任式を挙行する気配を見せてゐた。

首相　広田弘毅　　外相　吉田茂
内相　川崎卓吉　　蔵相　馬場鍈一
陸相　寺内寿一　　海相　永野修身
法相　小原直　　文相　永田秀次郎
（政友）前田米蔵　　中島知久平
（民政）頼母木桂吉　　拓相　下村宏

なほ未定の四閣僚は、政党尊重の意味で政民両党から二名づゝを入れることに内定してゐたので、残る一名は貴族院方面から物色するものと見られてゐた。五・一五事件で、犬養首相が薨死した後、斎藤・岡田の超然内閣には民政党は協力して閣僚を送つてゐたが、政友会の脱落組は別として主流は非協力的であつたが、岡田内閣の解散断行に依つて、議会に於ける政友会の絶対多数は破れたし、二・二六事件の現状大打破で腰を抜かしたと見えて、広田内閣の組閣には無条件協力で親軍派の中島・前田の両人が入閣することになつてゐた。民政は官僚出身の副総裁格の実力者川崎卓吉を内務に据え、永井柳太郎と共に親軍派と認められる頼母木桂吉を入閣せしめることゝなつてゐた。

組閣工作が順調に進行しつゝあるかに見えてゐた際、俄然六日朝になつて、一大難関に逢着した。陸軍側は五・一五事件、二・二六事件に責任を負うべきに拘はらず、二・二六事件に乗じて、否之を奇貨として益々政治に干渉し、政局を支配せんとする野望を露骨にした。即ち広田内閣は、軍の要望する国体明徴の徹底・国民生活の安定・外交の刷新・国防の充実の四大項目に盛られた国策内容は広田新内閣に依つて到底達成されないとの見透しをつけるに至つた。広田氏が組閣の挨拶と党員の入閣懇請を兼ねて政民両党総裁を訪問に行き、町田民政総裁邸の玄関に辿りついた時、後を追うて来た陸相秘書官からその手紙を手交された。広田は愕然とした。広田は閣員の選考に横槍を容れられ、寺内から「入閣は難いかも知れぬ」と嘯され、一時組閣を断念しようと考へたが、各方面の時局收拾の為めの蹶起の要望に力を得て、忍重自重、寺内と数回の会見を重ねた。吉田・下村・中島・小原等は入閣辞退を表明するし、陸軍は陸軍で「時局の重大性を認識する内閣の出現を要望する」声明書を発表し、他方、林・荒木・真崎・阿部・南大将等の諸軍事参議官の待命を発表した。

斯くして始めの予定は変更された。吉田外相は広田の兼摂となり、川崎は内相より商工相に廻され、官僚の潮が之に代り、小原直は林頼三郎に変へられ、中島の代りに島田が入り、下村は姿を消した。

閣僚候補の交迭は、表面寺内の仕事のようであるが、彼の背景をなす幕僚連のからくりに外ならない。彼は父ビリケン元帥の御曹子で、陸軍本省・参謀本部に入つたことはなく、

第四師団長時代に愚にもつかぬゴー・ストップ事件を起し、朝鮮司令官より、二・二六事件の直前に軍参議官に呼ばれたのが、事件の責任を負つた陸軍の巨頭連の辞職に依る独りの残存参議官であり、陸軍大臣に経上つた丈けである。丁度、戦後、アメリカの命令で、政界・財界・官界から指導者層が一掃され、サラリーマン重役が出来たり、県会議員級・局長級が大臣となつたようなもので、退職の一歩手前の新参議官が時局の中心人物となつたものであり、中央の空気が全部解らず、一切合切幕僚の指令に従つたのである。幕僚政治は、真崎・荒木等の軍巨頭を喪つたことに依りて高調に達し、軍の下剋上は一層激化した。寺内が広田内閣の末期、故浜田国松に本会議で腹切問答で押し切られ、遂に内閣を倒壊に導いたことは天下公知の珍事実である。「売家と唐様で書く三代目」といふ川柳は、ロシヤのニコラス、ドイツのカイザーだけではなく、日本の近衛や西園寺などもその方であるが、木戸や寺内などは二代目で国を亡ぼした仲間である。而も広田内閣の閣僚交替の理由が振つてゐる。

吉田は現状維持の巨頭牧野の婿であり、元駐英大使の自由主義者である、小原は美濃部博士の天皇機関説の処置がなまぬるい、川崎は政党人であるから、内相の要職に就かせられぬ、中島は軍需工業の成金である、下村は自由主義の朝日新聞の重役であるから、悪いといふのである。この軍の排撃のお蔭で吉田は敗戦後の総理となつてゐる。若し広田内閣の外務大臣でもやつてゐたら、有田と同様追放は免かれず、悪くすると重光同様六七年喰つてゐたかも知れない。

この内閣で軍部大臣は陸海軍現役の大中将でなくてはならぬといふ規則改正が行はれた。枢密院での寺内の説明では之は荒木・真崎が復活しては、粛軍の目的が果されぬとの弁明が奏功したので、政友出身閣僚の前田・島田が便乗して第一に賛成したので苦もなく枢密院会議を通過したのである。政友会の本部で前田・島田が詰問されたのもこの為めである。

広田内閣の針路は、首相・陸相・蔵相等の声明に依つて大体が窺い得られた。国民大衆も、事件以来、早くも平安晴朗なる日を迎へんと希望してゐたが、広田内閣成立するに当つて、各方面の気受けよく、無論充分強力な内閣とは見えなくとも、相当にバランスの取れた挙国一致内閣として、今後に期待をかけられた。

二、第六十九議會

僕は政治に興味を持つてゐたが、同郷に故山本悌次郎といふ政界の大立物がゐたから、議会進出が遅れた。従つて衆議院に顔を出したことも、『日本新聞』に関係してゐた時、唯一回あるばかりである。衆議院の建物のあるところも、日比谷とのみ知つてゐたゞけで、どこにあるか忘れてゐた。その癖、米国・英国・ドイツ・フランスの議会は三十代に外国留学の時に度々見学したものである。

昭和十一年五月一日第六十議会が開かれるといふので、四月三十日新潟を発つて東京へ帰つた。汽車中には新潟県第二区の松本(政友)佐藤(真一)、僕と同一選挙区の松井代議士(民政)等、お上り代議士で寝台が埋まつてゐた。呉越同舟といふことがあるが、正に呉越同車である。先輩の佐藤君に迎れられて衆議院へ行つた。

日本の議会は常でも取締りがやかましいが、二・二六事件の後を受けてゐたので、取締が如何にも物々しく感ぜられた。玄関に多数の人がゐて、当選証を調べる。議員マークを呉れる。それから、僕は中立であるから、第二控室へ案内される。こゝは一人一党の無所属組のゐるところだ。無所属は三十名以上あつた。半数は顔なじみだ。万年議員の尾崎行雄先生・松方幸次郎・秋田清・田川大吉郎さんの長老は勿論、学友の田渕仙人・愛国的論客の池崎忠孝君・中野正剛君及びその一党の面々、居心地は必ずしも悪くはない。

議長副議長の選挙がある。大正九年伯林で半年も飲み仲間であつた岡田忠彦が副議長に選ばれた。僕は岡田を掴へて「おい君、今頃副議長なんて、芽出度くもないでないか。大臣ならお芽出たうといはうが、少々気の毒だな。政治家は運だから仕様がない」と僕が挨拶する。本人も我意を得たりと「大して芽出度くもないから、人と握手する時は指三本で握手することにしてゐる。君とも握手をしよう」と指三本を出す。民政の富田幸次郎が議長に当選した。図体も大きく、面魂もよい。何となく線が太い。暴力団の団長にしてもよいくらいだ。広田や寺内よりも貫録がある。海軍の永野と同格の体格である。二人共土佐の出身だから、今年は鯉節の当り年である。そういへば、現在でも吉田総理も林議長も土佐の産である。小型でも鰹の味がよいかも知れぬ。

四日の開院式には新調の燕尾服を着て出た。僕は外国生活の時は度々燕尾服を着用する機会があつたが、日本ではこの時が始めてだ。外国から帰ると燕尾服はいらぬと思つて他人に呉れて了つた。今度要ることになつたからとて呉れたものを取り返すことも出来ず、止むなく新調した。陛下の御臨幸をお迎へするに、法規上必要とあるからには、新調も止むを得ない。

しかし、自分は開院式の服装に燕尾服を着さすような服装令は改正すべきだと考へる。西洋では昼の礼服はモーニングと定まつてゐる。フロックは葬式の時か、寺詣りの時に着るものである。燕尾服は夜会服で、正式の晩餐の時、上等席で芝居見物する時、ダンスをやる時に着ることになつて居る。然るに、日本では西洋を摸倣するに直訳ならまだしも、誤訳をやつて、葬式にもあらざる婚礼の時に、縁起でもなく、花婿がフロックを着用に及んだり、議員が白昼公然燕尾服を着て、丸で蝙蝠が昼間迷ひ出るようなことをやつて、文明国だと得意がつてゐる。尤も帝政時代のオーストリイのハツブスブルグ家の習慣では、昼夜燕尾服を着たりすることもあり、

ドイツでも大学教授が就任演説の時に燕尾服を着たものであるから、日本の宮中服装令はヨーロッパで一番由緒のあるハプスブルグ家を学んだものであらう。僕は昭和十二年の林内閣の時に予算委員会の席上、宮中の服装令を改正すべしと要求したことがあるが、間もなく、之が実行された。殊に敗戦後の今日では、燕尾服は音楽家が演奏の時着用に及ぶだけになつた。

粛振議会とあつて、車駕御親臨の際には、玄関先きまで奉迎した貴衆両院議員の数は空前の多数であつた。怠け者揃ひの貴族院議員などは、常の十倍も出たといふことだ。如何に彼等が怠けて来たかゞ解る。欠席常習議員の為めに、貴族院は気楽院の別名があつた程である。

聖上が御勅語を賜はり「東京の事件は朕の憾みとするところなり」と仰せられた時には、貴族院に集まつた両院議員は何れも首を垂れて恐懼した。血の気の多い政友会の若手議員には泣いた者もあつた。終つて「祖国会」の同志の勝又代議士がやつて来て「北さん、泣いたか」と問うたから、僕は唯厳粛の気持になつた許りだといつたら、彼は「泣かん奴があるか」と憤慨した。既成政党など〻悪くいはれるもの〻、尊王心の異常発達者もゐることは、忘れてはならぬ。

第二控室には、始め三十三名ゐたが、地方無産党系の者四名は社大党の控室に去り、始め、中三クラブを造ることに熱心であつた秋田清・滝正雄の両君は純無所属に去り、残り廿七名で第二控室の名義で交渉団体を形成した。政見も行動も拘束せず、唯所属議員に議会での委員の割り当てと議会での発言の便利を与へようといふに過ぎない。政党ではないから、政綱もなく、又従つて代表者もない。委員も演説も希望者中から抽籤で決定する。尾崎・松方・田川の大所が委員にもならず、無名の新参が委員になつたりするのも、この理由からである。

僕が二十歳の時、早稲田の政治科へ入学した時、同級生であつた田渕豊吉君が帰り新参で議員となつた。彼は仙人といはる〻程の酒仙で七回立候補して四回目の当選である。僕が「田渕君、君などは大政党に居ると、安く見積つても、次官くらいにされたのに、馬鹿だな」といへば、彼は「君などは学者としてじつとしてゐれば、天下の学者となれるのに、議員になつて格が下つた。君こそ馬鹿だ」とやり返した。僕は松方老と田渕仙人と三人で能く、おでんやへ飲みに行つた。松方老は隠然たる首領株で二十七名の同志を新橋あたりで馳走した。

無所属は一人一党であるから、仕事の分担もよく、専門的知識の交換もよい。こんなところでは政府提出の法案の研究も出来ない。処士横議の風が旺んであるのみで、政治上の具体的の知識は穫られない。予算委員でも、各種委員でも、委員会の模様を報告もしない。無拘束の自由は享楽は出来る代はりに、議員として無責任となり易い。しかも、此等の二十

七人からは相当に議会の花形も出た。尾崎・田川の両老は勿論、中野・杉浦・平野（力三）、池崎忠孝、親軍派の小山亮・今井新造・親米反軍の笠井重治等が出た。

第二控室を代表して尾崎翁を演壇に送つたことがある。その際軍部をこきをろしたといふので、愛国団体の某と数氏が僕等のところへねちこんで来た、僕は尾崎翁を代表者といつても、政綱のない一人一党主義の交渉団体だから、尾崎が何をいはうと勝手であるとつつぱねてやつた。

僕は、尾崎さんとは相当懇意にしてゐた。昭和八年僕が第二回目の外遊から帰国する際、フランスのマルセーユから照国丸に乗つた。尾崎翁は二人の令嬢・品江・雪江さんを伴うて乗船してゐた。そうして僕は尾崎翁と二人で埃乃のピラミッドを見学した。翁は幾百尺の石畳を例の健脚で平気で登つた。何しろ今より十八年の昔で、翁が七十五歳頃であるから、今日程老衰してゐなかつた。船の中では僕は尾崎翁に例の理想論を説かれてはこまると考へ、先生の過去の伊藤公・山県公・大隈公・西園寺公・板垣伯観を述べてもらいたいと申し出して、毎晩政談を聴くことが出来た。先に米国滞在中翁の『中央公論』に書いた「墓標に代へて」の論文が国内の右翼の連中の感情を害してゐたので、船が瀬戸内海に入らぬ内から、「生きては日本に上陸させぬ」といふ意味の電報が何通か船中に舞ひ込んで来てゐた。雪江さんや品江さんが、心配して僕にどうしたらいゝかと問ひ、且つお父さんには何もいはないとのことであつた。僕は良策があるから心配なさるな、お父さんに打ち明ける必要もないと注意してゐた。僕は満洲事変の直前、大阪で講演した時、知り会いになつた国粋大衆党の総裁笹川良一君宛てに「僕帰朝神戸につく歓迎頼む」といふ意味の電報を打つて置いた。僕が神戸の埠頭につくと「北昤吉氏歓迎」の幾本かの旗を立てた同君の部下が十数名群がつてゐた。僕は船のブリッヂに立つて大声に叫んだ。「尾崎先生は奥様の遺骨を持つて今帰つた。中央公論の文章が気に喰はぬとて襲撃する者があるようだが、先生は権力の地位にある人ではない。笹川君是非保護頼む」。いひ終ると二三人の青年が尾崎先生目がけてブリッヂを上らうとかけつけた。ところが笹川親分は大音声でその奴つかまえろと呼ばつた。部下が数名飛び出して、暴漢を取り押へ、鉄拳を見舞はした。警官が飛び出して双方を捕えて警察へ連行した。僕は笹川君の招待で或る料亭で御飯といふことになつた。国際聯盟脱退直前ではあるし、警官が二名僕と笹川の会食に立ち会いたいといふ。笹川はすかさず家の若い者を皆解放するなら一緒に飯を食はうといふ。警官は早速承知して飯を食つた。

船を降りる時僕が大音声でどなつたのを、三井の米山梅吉さんが令息の帰朝を迎へに出てゐて見掛けて、其の後僕に会つた時、僕の態度を見上げた者だとお褒めに預かつた。僕は尾崎翁には此の事件を今日迄知らさずに居るが、二人の令嬢は大に徳としてゐた。当時尾崎翁は悲壮の覚悟で何時死んで

も差支いないと考へてゐたので、翁の保護を笹川に頼んだのでは翁の面目に繋はるので、僕の歓迎に来て呉れという名義で、笹川一党を即座に翁の保護に利用した訳である。

僕は尾崎翁ほど英米一辺倒ではないが、翁の自由な議論を議会でやらせる為めに非常に骨折つた。後翼賛会反対の演説を翁がやるというので、僕等は骨折つたが、翼賛議員同盟がやらせなかつたので、芦田君、石坂豊一君と僕と三人が骨折つて漸く三十名の連署を得て議会に質問書を提出せしめた。

三、二・二六事件に関する秘密会議

第六十九議会は二・二六事件の後を受けた議会であつたから、議会は非常に緊張し、且つ真面目であつた。五月六日には秘密会で寺内陸相から、二・二六事件の真相の披瀝が行はれた。事件後二ヶ月余で、事件の真相が明かでないので、説明が不充分であつた。質問者も充分材料を握つてゐなかつたので、充分突き込めなかつた。唯中野系の杉浦武雄が一番光つた質問をやつた。彼は事件発生後陸軍当局が泡を喰つて「諸君の行動は国体真姿の発現なり」とか「諸君の精神は天聴に達したり」などおだて上げ、而も皇軍の一部として三宅坂一体の警備に任ぜさせ、食糧まで供給して、後になつて叛軍呼ばゝりするは怪しからんと叫んだのは、陸軍当局を返答に困らせた。こんな質問否、詰問は少数党の代表でなければやれぬから、第二控室存在の意義があつた。第二控室は質問者を籤で決めることは、前記の通りであつたが、僕は兄が関係してゐると看做されたので、特に質問者に選定された。新米代議士で初登壇である。殊に議論が殺気を帯びてゐる時で、同情者は国粋系の第二控室の少数者だけであつた。僕が演壇に立つと、政友会席から「逆賊の弟引つこめ」との叫びが起つた。政友の小高長三郎の声であつた。寺内は、此の事変は部外の者の煽動に依るもので、その思想は我が国体と絶対に相容れざる矯激で、共産主義的のもので、事件は前古未曽有の不詳事だと昂奮して述べた。僕は之に対して簡単に述べた。軍人が外部の思想の影響を受けることはあるが、国体と絶対に相容れざる思想に侵されるほど軍隊教育がなつてゐない筈はなからうではないか。又国防強化を鼓吹した新聞班の「陸軍パンフレット」こそソ聯式国防強化論であつて、二・二六事のみならず、五・一五事件の如きも、「陸軍パンフレット」に負ふ所が多いではないかと質問した。寺内ははつきり明言しなかつたが、兄の『国体論』に天皇機関説を述べてゐるところを国体と絶対に相容れざる思想と考へ、又『日本改造法案大綱』に盛られてある主張を共産主義だと騒いだことは明かである。右改造法案には皇室財産国家下附、地主の土地を十町歩に制限、私有財産を百万円限度に制限、私的企業を千万円単位とすること、都会地の土地を市有にする事、華族制を廃止し、貴族院・枢密院を廃止することを要求してゐる。而も皇室財産を廃止すると共に、皇室費を年額三千万円

（現在では三十億以上）とすべしと主張してゐる。どこに共産主義のところがある。マッカーサーの農地革改は土地一町歩、不在地主は一反歩も所有出来ぬとゝなつてゐる。私有財産も百万円ならば今日では二億円に当り、私的企業も千万円ならば、二十億に当つてゐる。現に枢密院・貴族院は廃止され、華族制も廃止され、皇族すらも大部分平分と化せられた。殊に義務教育は満二十歳までといふことゝなつてゐる。外交は米国に経済同盟を結び、支那とは軍事同盟を結成、英ソ両国の侵略を排し、日米共同して支那開発すべしと主張してゐる。どこに共産主義のところがあるか。陸軍が庶政一新など叫び、現状打破を叫びながら、北一輝の改造法案の大綱を実行すれば、日米戦争の愚を犯さず、ソ聯も東洋に進出し得ず、日本は現に米国に次ぐ大繁栄国になつてゐるではないか。僕は此等の点を述べたかつたが、軍が天皇機関説排撃でのぼせ上つてゐるし、議会の空気も殺気立つてゐたので、兄の思想を弁護しては私情に囚はれると考へられるのも心外だと考へ、二・二六事件の真相を明かにしてから、ゆつくり、予算会で質問する積りで、あつさり切り上げて置いた。終つて席へ帰ると、兄と別懇の中野正剛君が、僕の質問を物足らぬように感じてか、北君なぜ「逆賊の弟引つ込め」と弥次つた時、「我輩は逆賊の弟であります」とはつきり答へなかつたかと憤慨するし、中野系の三浦寅雄代議士も、もつと寺内をやつつけなければ折角演壇に立つた意味がないではないかと不平をいはれた。僕も、事件は、陸軍が常に庶政一新など、いつてゐるにおだてられたのが根本と思つてゐる。僕も公憤と私憤とが交つて、いつか寺内をやつつけようと思つてゐたのに、其の機会は意外に早く来た。

四、廣田内閣の倒壊

此の年の秋に、僕は久し振りに中野桃園町の兄の妻君の家を訪ふたら、二・二六事件の元兇の中心人物と看做され死刑の宣告を受けてゐた故磯部大尉の夫人が獄中から大尉に手渡されてゐた手記を僕に見せた。鉛筆の走り書きであるが、幾枚もある。始めに、此の手記を僕と故岩田富美夫と薩摩雄次に見せて呉れと書き出し、色々秘密軍事裁判のことが書いてある。そうして之を天下に公にして軍法会議のインチキぶりを明かにして、軍法会議の裁判長たる寺内陸相を葬むり内閣を倒壊に導き軍法会議を破壊して呉れと熱烈に要望してある。僕は此の手記を将来に残す必要ありと考へ、当時岩田君が社長をやつてゐた『やまと』新聞社へ訪問し、岩田君と相談して、之を写真に撮ることにした。十枚くらゐの枚数があつたと思ふ。やがて第二次の手記が、磯部夫人の手から、兄の妻に渡され更に僕の手に渡つた。之も写真にした。写真を撮る時には、僕の代りに美術学校を経営してゐた同郷の村田芳太郎と国策映画会社の役員であつた浅岡信夫（後の参議院議員）と藤原繁太郎（後の社会党代議士）とが立ち合つてゐ

た。六七枚づゝ撮つて置いた。

手記の内容は、軍法会議は家兄北一輝が明治卅九年日露戦争の翌年に出版し、直ちに発売禁止になつた『国体論及び純正社会主義』が北の今日の危険思想の渕源だとなし『改造法案』の日本改革論と結び附けて、共産主義的革命を青年将校に植え附けたし、天皇機関説・皇室財産国家下附、私有財産制限・土地所有制限を危険思想だと主張し、この思想を実行するよう青年将校に勧めたというのである。僕が秘密会で寺内の説明を聴いたと同じ論法である。終戦後当時判士であつた某少将（後中将となる）が当時の日記を持参に及んで色々説明して呉れたが、この判士は北・西田の無罪を主張し、当時の陸軍次官梅津中将に二回も進言したが、既定法針で極刑の方針で臨んだのである。某判士が病気なのを之が極刑論者であつたので交迭を肯んぜず、結局判士一名の多数で北・西田を極刑にしたのである。何しろ辯護士も附けず、徹頭徹尾秘密裏に行はれたから、如何ともし難い。

僕は之を闇から闇に葬つてならぬと考へ、江藤源九郎少将（当時代議士）に見せた。江藤は兄の懇意にしてゐた平沼騏一郎に見せた。又僕は法華経の同信者であり、兄の理解者である故小笠原長生子に見せ、小笠原中将は加藤完治大将に見せた。浅岡君は頭山満翁・内田良平氏に見せた。ところが岩田君の舅下の某君が之を渋谷の某憲兵少佐に見せたらしい。それで撮映に立ち合つた前記村田・浅岡・藤原が渋谷の憲兵隊に検束された。某少佐は僕を呼び出さうと思つてゐたが、第十七議会開会間際であつたから、僕の宅へ憲兵を派遣し、藤原は北さんが出頭して辯明すればすぐ解放されるのだとの名義で僕の宅へ来た。家内は主人は江藤源九郎さんの所へ行つてゐるから訪ねなさい、主人は逃げたり、隠れたりする性質でないと平然たるものであつた。家内は身体が虚弱だが、気が強いから従来度々こんなことがあつても平気の方である。僕は時々いたづらをいつて、お前は桃太郎の「反対だな、「気は優しくて力持ち」ではなく「気は強うして力無しだ」と言つて腹を立てられたことがある。

即日渋谷憲兵隊へ出頭した。少佐は太つ腹らしい、陰性なところがない。「北さん、磯部の獄中手記を写真に撮つて方々配附したですな。」僕は「いやそんな記憶はありません。」「隠しても駄目です、立派な証拠がある」「証拠があるなら見せていたゞきたい。」彼は暫らく考へて、「嘘をいふと軍法攪乱罪といふ重罪になりますよ。」「秘密軍法会議は外から攪乱しようがないではないか。」彼はそれならばといつて卓上に写真の種枚を重ね上げた。万事休す。「どうも嘘をついて申し訳ご座いません。併し写真を撮つた連中と事実を吐かん約束をした上は、あなたに本当をいへば、相手に嘘をつくことになり、相手に忠実なればあなたに嘘をつかざるを得ないです。」そうして、「何とでも御処置を願ひます」といひ放つて、裝度胸をきめた。すると、少佐は「いや、あなたの電話をこちら

で数日前から盗んでゐたが、あなたは浅岡に電話をかけて、種板は必ず破壊し、焼き増しは決して撮るな、他人に見せてはいかぬと指令を発してゐたから、焼き増しをとつたのも、他人に見せたのもあなたの責任ではないから、以後を謹むことに願ひ、お帰りになつてもよう御座います。序に申しますが、浅岡といふ男はえらい度胸だぞ、軍法会議攪乱罪に問ふぞ、八年は食うぞといつて嚇したら、額をつき出して、僕に罪あらばピストルで打つても宜しいといつた。大した者だよ」と大に褒めた。浅岡君には色々批評する人もあるが、僕は此の一事で共に大事を為すに足る人物と確信するに至つた。

此の事件はこれで一先づ收まつたが、僕が無事だつたのは、岩田君の義侠に負うところが多かつた。岩田君は僕が手記を渡したのを一人で写真を撮つて僕へ郵送したのみだと頑張り続けた。事件の翌年の七月になつて、蒸し返されて、岩田、僕等十数名が一網打尽にされ、僕は九段下の憲兵隊本部に留置され、議会開会と共に二日間滞在で解放されたのに、岩田は独り罪を背負つて半歳も留置されたのには今尚ほ感謝してゐる。それでも渋谷憲兵隊事件後、岩田の舅下の三浦義一君と許斐君と二人で来て、憲兵隊との約束があるから、残りの写真を出して貰ひたいと申し来り、一部と秘密書類だけは小山菊代議士に預けて、信州の山に匿してもらつて、残りは焼いたと称してゐた。然るに二三日立つと渋谷の憲兵がまだある筈だと部数を数へて足らぬといふので、郷里の女中に予め旨を含ませ、長州風呂の所へ憲兵を案内させ、確かに焼きましたと頑張らせ、万事OKとなつた。岩田は残りの写真を全然憲兵少佐に渡し、事件解決といふことにて一緒に飲んだとのことである。

因にこのお蔭で、江藤源九郎・小笠原長生子は共に憲兵隊の一応の調べを受けた。

渋谷の陸軍刑務所内には、二・二六事件の同情者が多いと見えて、磯部夫人はまたしても主人から奉書に堂々と墨で書いて血判をしたものを僕に持つて来た。旨意は伏見軍令総長宮への献白状である。小笠原さんから宮様へ差し出して貰いたいとの事である。内容は北一輝無罪論である。自分の刑を免れようなどゝは一言も書いてなく、何とかして北を免れしめ、再起を計らしたい烈々たる意気が燃えてゐた。

僕の懇意な人物に大杉俊一といふ秩父宮と士官学校同期生の満洲浪人がゐる。西田税も幼年学校・士官学校共に秩父宮と同期である。その関係か秩父宮様は事件前二度も兄の寓居を訪はれてゐる。兄を先生と称し、兄が殿下と敬称すると、「殿下などゝいはないで、秩父さんで沢山」だといはれたことは、兄の側近が皆知つてゐる。僕はお会いしたことはないが、僕が昭和十七年『戦争の哲学』を公にした時、秩父宮職員がイの一番にこの書を註文したと出版屋が喜んで僕に電話した。

こんな関係で、僕は大杉に頼んで軍法会議の模様を書いた

写真を秩父宮へ届けて貰つた。不断寄り附きもしない大杉が度々フロック姿で宮邸へ伺つたので、職員に怪まれて自然に足が遠のいた。又僕が大杉に頼んで、磯部の伏見宮への献白書を届ける小笠原長生宅を訪問して貰つたところ、昔気質の小笠原さんは、宮様への献白は恐れ多いとして突き返され、僕は後の祟りを恐れて、焼いて了つた。今となれば保存すればよかつたと思ふ。

やがて第七十議会が開かれた。広田内閣は二・二六事件の後始末をやつたが、その挙国一致内閣は政友から二名、民政から二名閣僚を取つてゐながら、軍備の国防強化の推進力に押されて、政党との板ばさみになつたと弱り抜いた。二大政党も事件後挙国一致の内閣に協力したものゝ、外交調節と民生安定との二大標榜と国防強化の標榜と両立し難いことを知つて軍部に不満を持つに至つた。真崎・荒木・阿部・林・植田・小島の大所を一時に喪つて、坊ちゃん育ち寺内一人となつたから、幕僚に押しまくられて、無方向に猪突猛進するのみである。二大政党共に閣僚を送つたが、前田・島田等は早くも軍部の捕虜と化し、人質と化した。

議会直前に政民両党は大会を開いたが、両党共反政府の姿勢で、政府に肉薄せんとする気勢が鋭かつた。隣邦支那とソ聯は素より列強は帝国の動向に異常の注目を払つてゐた。広田内閣は一応不戦主義を標榜し、東洋平和を確立せんとしながら、一方準戦時予算を樹立せんとした。一方に国防強化を主張し、他方に民生安定を主張する両頭の怪物は、防共協定までやつて、国交調整どころか、国交断絶の姿勢を整える矛盾に陥つてゐた。両党共之には敏感であつた。

先づ民政党総裁町田忠治は、政府は先づ成都・北海に於ける虐殺、被害事件の如き突発事件の解決に沒頭し、日支関係の根本的調整を敢てし得ず、我が官憲（武権を逞廻しに）にして、廟議の決定を待たず、外交上の重要機関を独断専行する如きことあらば、国家の憂これより大なるはなしといひ、更に三十億を超ゆる予算に関しては国民生活の安定期し得べからず、一般国民生活は著しく脅威せられ、予算の遂行容易ならず、徒らに政治的、経済的統制強化を主張して、黔首を愚にする、官憲の横暴は立憲治下に於て断じて許されざる所と断じた。又政友会総裁演説（鳩山総務代読）に於ても、要旨は民政党総裁の演説と同巧異曲である。曰く、「三十億四千万の尨大予算と之を支弁する為めの大増税と電力国家監理行政機構改革及び義務教育延長が所謂庶政一新であるが、而も此等準戦時体制の独断的推論の下に立案せる諸案が、国際状勢に影響し、国民生活の脅威を惹起するに至らざるか、国家の為め深憂に堪へぬと叫んだ。現内閣は統制主義が最善の政治の如く考へて居る様子であるが、統制主義は国政の権威ではない。政治・経済が蔑にされ、又動もすれば軍部が優越感に依り軍部中心主義を以て他に臨むが如きこと寧ろ全体主義の逆行で、国家発展の大精神を沒却するものである。更に曰く、

現内閣の外交に至つては支離滅裂、失敗の痕歴然として覆ふべからざるものである。」と述べ、更に外交の失敗を痛撃して外務・軍部の多元外交に論及し、諸外国の信用失墜を指摘した。

この他、大衆党・同民同盟・東方会も政府糾弾の姿勢にあつた。要するに、二・二六事件を奇貨とし、之を利用して軍部独裁の傾向あることを攻撃したのである。之に対する陸軍側の反応は左の如くである。陸軍は声明した。

（一）現下の国際情勢特に極東の現況において国防充実の必要につき、殆んど何等言及していない二大既成政党の時局に対する正当なる認識ありやを疑わざるを得ず。

（二）庶政一新の必要並びに電力国営案・義務教育延長案等につき趣旨に於て同意している、両政党がこれが具体的実現案につき何等建設的態度を採らないのは遺憾である。

（三）政民両党共に閣僚を出して現内閣を支持している形式を採りながら、攻撃をなすというのなら先づ党出身閣僚が内閣から引き揚げて堂々攻撃を開始すべきである。現在の如く首尾一貫しない政党の対政府態度が時局を一層不明瞭ならしめている。

嵐は既に予想せられた。廿一日には民政党からは桜内幸雄・政友会からは浜田国松がそれ〳〵全局的な質問演説せんとしている。二十日の夜の雨は雪となつた。飛雪紛々。地は既に白皚々である。政党には軍部攻撃の下心があり、軍部は政党を恫喝する意気込みがあつた。

二十一日の議場の空気は既に山雨到らんとして風楼に満つの慨があつた。馬場蔵相は勧銀総裁の履歴があるのみで、軍部便乗の尨大予算の提出理由を述べた。既に弥次が飛んだ、有田外相が外交上の演説をやつたが、何が故に防共協定をやつたか、何国を相手に防共をやるのか、支那蔣政権を之に参加せしめないで役に立つかの疑問は議員間にあつた。中野正剛君は大に弥次つた。外相として初登壇の有田も少しテレた気味である。斯かる強烈の弥次は近来の議会では珍らしい。桜内に次いで演壇に立つた浜田国松は元来犬養系の闘士であつて、三重県で尾崎行雄氏と二度も小選挙区で渡り合つた議会有数の論客である。寺内の政党排撃・軍部万能の演説に対して、舌鋒鋭く毒舌を揮つた。曰く、「昔ては蒙古百万の軍が我が西陲を襲つたが、日本男子は之を追つ払つた。然るに満蒙に暴威を振う我が陸軍の暴風は先づ九州西岸を襲ひ、東進して帝都を襲ひ始めて居る。我々は断じて之を阻止しなければならぬ」と目に見えるような描写法で陸軍の政治関与・政党排撃を痛撃して壇上を降つた。すると寺内が真赤な顔をして、禿頭に湯気を立てゝ、浜田議員の質問は正に我が陸軍を侮辱するものなりと断じて自席についた。すると浜田は自席より簡単に答へようとした。

僕は陸軍の政治支配に反感を持つ公憤と共に兄を死刑に処せんとする私憤も交つてか、自席に屹立して「寺内どこが軍

を侮辱したか。」と一喝し、更に浜田の席に向つて、「浜田演壇に立て」と大声を発した。この怒声が満場に響いた。政友会席は既に陸相に対する反感で色めき立つていたので、僕の大喝一声と共に万口一時「浜田演壇に立て」と叫んだ。隣りの血の気の多い政友会所属藤井達次君は「寺内馬鹿野郎」と叫んだ。当時議員では有田などゝ弥次つても、寺内と陸軍大臣を呼び棄てにした者は僕が元祖のようだ。一同の気勢に煽られて、闘士既に満々たる浜田は一層の闘志を奮つて演壇に立ち「陸相が嘘を云つたか、自分が嘘をいつたか。僕が嘘をいつたら腹切つてお目にかける。陸相が嘘をいつたら腹切りなさい」と例の有名な腹切り問題となつた。

本会議は間もなく散会となつて、院内に緊急閣議が催された。寺内陸相は泣いて解散を叫んだが、高が質問演説で解散は出来ぬと党出身閣僚に自重論が出て、廿二日より二日の停会の詔勅の降下を乞うた。この間寺内は何に血迷つてか、幕僚に煽られ、議会解散を止まなかつたが、解散を懲罰的にやつても出て来るものは矢張り政民両党に過ぎないから、永野海相の解散反対が因となり、遂に広田内閣は総辞職となつた。我々小会派の者は清瀬一郎氏が鹿を手に入れたから、会食懇談したいというので、麻布竜土軒に集つていて、解散かと思ひの外、内閣総職と聴いて、一同凱歌を挙した。

僕は議会生活十数年中嘗てこんなうれしい愉快なことはなかつた。磯部元大尉の念願は寺内打倒によつて一応通つた。

勿論倒閣は僕の手柄ではない。不平不満の瓦斯が議場に充満していたのに、マッチ一本つけて、大爆破をやつたようなものだ。当時新潟県会議長であつた田下君は議会を傍聴していたが、北さんの大声は傍聴席まで聞えたといつた。牧野良三君は『文芸春秋』で僕の名は出さなかつたが、〇〇〇番の某議員が兄のことで憤慨したので、浜田を煽動して内閣を自滅せしめたと書いた。

しかし、続いて生じた林内閣は政党から閣僚を取らず、純超然内閣を作つて、政党を敵として、無謀の解散をやり、陸軍の政党征伐が益々露骨となり、遂に支那事変を捲き起す勢を作つたのである。

日本及日本人　十月號
昭和二十六年十月一日發行（第二卷第十號）
定価　一〇〇円（送料六円）
予約時代價第一年分千二百圓（送料共）
編輯發行人　寺田憲一
印刷所　同盟印刷株式會社
發行所　日本新聞社
東京都千代田区西神田二ノ二七
電話九段(33)七九五五番
振替東京一九五九四五番